

## 詩篇 第19編 1節

「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」

思わず天を仰ぐ、という表現がある。もはやなんの手立てもないまま、その場に立ちすくむ姿を描写する。地上には万策尽き、万事休すのまま天を仰ぐ者には何が見えるのか。何も見えない。言葉が生まれえない。黙るだけである。

しかし、ここで歌う者は、天を見通して神の栄光を見る。そればかりか、天が神の栄光を語り告げていることを聞いている。確かに天を創造された神を見て、その栄光を仰ぐ。天は真に創造主を語り告げている、と天を仰ぐ者が言葉を放つ。この者も、ときには苦難のなか天を仰ぐことはあったはずだ。今まさに天を仰いでいるかもしれない。しかし、歌うのである。言葉が生まれるのである。天を超えて見えるお方がいる。

さらに大空を見渡す。大きな空と見る者もいるだろう。見渡す限り、何も無いと嘆きの大空しか見えない者もいるだろう。しかし、ここで歌う者は、この大空に御手を見る。そして、御手のわざを見る。広がる大空に働く御手を見るのである。もはや、大きな空ではなく、偉大な御手を現す大空となる。歌をかきたてる大空となる。